

# 第6回 新収蔵品展

2023年5月20日(土)～6月11日(日)  
実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室1・2

## 武内小鸞 (生没年不詳)

江戸時代後期に活動した女性画家である。名は千賀、字を左琴と云い、長門国(現在の山口県西部)に生まれ、京都に出てはじめは円山応挙(1733-95)の子・応瑞(1766-1829)に学び、美人画を描いたとされている。のちに岸駒(1749/56-1839)に師事し、人物画だけでなく、山水画や竜虎図も描くようになったという。以上の伝記は、岸派の画家である白井華陽(生没年不詳)の『画乗要略』(天保2年=1831序)巻五「閨秀」の項目に掲載されており、現時点で小鸞に関する記事が確認できる唯一の資料である。当館で所蔵している小鸞画3点の画題は「唐美人」「孔雀」「虎」で、いずれも円山派ならびに岸派の画家による作例が多く現存している。そして、特に《虎図》は、虎の名手として名高い岸駒が初期に描いた柔和な虎ではなく、寛政11年(1799)頃に虎の頭部と四脚を入手してから描くようになった、筋肉質で獐猛な虎の特徴をよく踏まえて描かれており、かなり習熟しているため、小鸞の本格的な画風は岸駒に師事した頃に形成されたものと考えられる。(S)

【主要参考文献】  
木村重圭編『日本絵画論大成』第10巻(ベリかん社、1998年)  
実践女子学園創立120周年記念特別展『華麗なる江戸時代の女性画家たち』(実践女子学園香雪記念資料館、2015年)  
鈴木美有「武内小鸞筆《虎図》について」(『実践女子大学香雪記念資料館館報』第19号、2022年)

## No.1 海棠孔雀図

18世紀末  
絹本着色・軸  
116.4×51.3cm  
款記「小鸞女史」  
印章「小鸞女史」朱文長方印

## No.2 虎図

19世紀  
絹本墨画・軸  
96.7×36.3cm  
款記「小鸞女史」  
印章「武内」「小鸞」白文連印

## 跡見花蹊 (1840-1926)

跡見学園創立者であり、明治・大正期を代表する教育者として名高い人物だが、日本画家・書家としても活躍したことが知られている。名は瀧野、また木花と云い、花蹊、西成と号した。摂津国西成郡木津村(現在の大阪市浪速区)に、郷士で歌人でもあった父・跡見重敬、母・幾野の次女として生まれ、幼少期より書や画などを習った。12歳より大坂の石垣東山(1804-76)らに書画を学び、17歳で京都に出て頼山陽門下の宮原節庵(1806-85)に書を、円山応立(1817-75)・中島来章(1796-1871)、そして日根対山(1813-69)に画を学んだ。その後、大坂に戻り、安政6年(1859)花蹊19歳の頃に父・重敬の私塾「跡見塾」を引き継いだ。慶応2年(1866)に京都に移って私塾を開いた。それから4年後の明治3年(1870)に京都の私塾を閉じて上京し、明治8年(1875)神田中猿楽町に「跡見女学校」を開校した。これが、現在の跡見学園の出発点となっている。跡見女学校の絵画の授業では自ら学生の指導に当たり、教材としての手本作成に注力するなど、花蹊

の画業は強く教育と結びついていたと言える。(S)

【主要参考文献】  
跡見学園女子大学 花蹊記念資料館 開館記念特別展『跡見花蹊とその時代』(跡見学園女子大学花蹊記念資料館、1995年)  
跡見花蹊著/花蹊日記編集委員会編『跡見花蹊日記』(跡見学園、2005年)  
仲町啓子編『江戸時代の女性画家—実践女子大学香雪記念資料館所蔵女性画家作品図録—』(中央公論美術出版、2023年)

## No.3 2022年度新収蔵品

### もうこのず 猛虎之図

19世紀後半～20世紀初期  
絹本墨画淡彩・軸  
124.7×71.1cm  
款記「花蹊女史」  
印章「跡見」白文長方印、  
「華溪女史」朱文長方印



## 野口小蕙 (1878-1945)

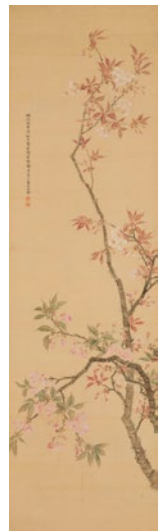
南画家・野口小蕙(1847-1917)の娘として生まれる。名は郁。小蕙と号した。幼い頃より母・小蕙に絵を学び、明治25年(1892)には弱冠14歳にして日本美術協会秋季美術展へ《少女観月図》を出品、幼年生褒詞に選ばれる。以降、同展へ明治35年まで毎年出品し、明治31年の《玉蜀黍図》、32年の《秋草七種図》、33年の《秋園錦繡図》、34年の《春暎晴色図》、35年の《芙蓉》と5年連続で褒状一等を受賞した。さらに明治37年には、《秋山暮靄図》で三等賞銅牌となっている。また、明治31年には第1回日本画会展へ《秋山烟靄図》を出品、当選百画に選ばれる(以後も8回当選)。明治33年にはバリ万国博覧会へ《秋草七種図》を出品、同年6月には日本画会展へ行啓した皇后の御前で、佐久間棲谷(1868-?)や武村耕靄(1852-1915)、跡見玉枝(1859-1943)ら他の女性画家たちとともに揮毫を披露する。大正2年(1913)、宮内省の下命による夏用風炉先屏風を揮毫。その後、母・小蕙の逝去をはさんでしばらくの間、展覧会への出品は見られなくなるが、大正10年には高島屋で開催された現代作家新作展へ対幅の《松竹梅》を出品。日本美術協会展へも大正12年より出品を再開する。昭和6年(1931)の第87回美術展覧会には、それまでの画風を一変させ、新たな画境に挑んだ作品《閑庭秋色》を出品。翌昭和7年の第90回美術展覧会にも、同様の傾向が窺える《秋園錦繡》(山梨県立美術館蔵)を出品した。(T)

【参考文献】  
平林彰「野口小蕙試論」(『山梨県立美術館研究紀要』第33号、2021年)

## No.4 2022年度新収蔵品

### おうかす 桜花図

明治29年(1896)  
絹本着色・軸  
120.6×34.0cm  
款記「明治丙申清和月寫於閑雲野鶴草堂小蕙女史郁」  
印章「郁印」白文方印、  
「小蕙女史」朱文方印







(第8回展)を出品した。大正13年には、江戸時代の儒学者・藤澤東咳(1795-1865)が開き、南岳(1842-1920)、黄鶴(1874-1924)、黄坡(1876-1948)と引き継がれた漢学塾・泊園書院に入塾。また書画家番付にもしばしば登場しており、昭和12年(1937)3月に益井文英堂より発行された「改訂古今書画家一覧表」には、「現代閩秀各派名家」のひとつとして、その名が記載されている。青溪のもとでは多くの弟子たちが学んだといい、指導にも熱心であったと伝えられている。

大正5年の《青緑河橋新柳図》や個人蔵の《青緑山水図》など、大正前半期頃には最初の師である青蘭の画風をよく受け継いだ作品を描いているが、大正末から昭和初期にかけ、日本南画院展へ出品した作品では、日本の田園風景を題材に、近代的な感覚を取り入れた画風を展開させた。(T)

#### 【主要参考文献】

横山俊一郎『泊園書院の人びと その七百二人』(清文堂、2022年)

### No.13 2022年度新収蔵品

#### せいろくかきょうしんりゅうず 青緑河橋新柳図

大正5年(1916)

絹本着色・軸

125.8×41.1cm

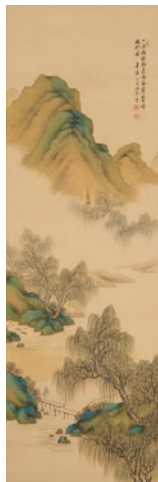
賛「一溪鷗散桃花雨両岸鶯啼楊柳風」

款記「青溪女史池愛寫」

印章「池田愛印」白文方印、

「青溪」朱文方印、

「煙霞」白文長方印・関防印



### のぐちしょうりん 野口小蘋 (1847-1917)

漢方医・松柳春岱(?-1862)の長女として大坂に生まれる。名は親子。字は清婉。はじめ玉山と号し、のち小蘋と改めた。8歳で四条派の画家・石垣東山(1804-76)に師事。その後、京都で日根対山(1813-69)に南画を、小林卓斎(1831-1916)に漢学を学び、明治4年(1871)に上京後、岡本黄石(1812-98)に漢詩を学ぶ。明治6年、皇后の御宸殿襖に花卉図を揮毫。明治10年には滋賀県で酒造業を営んでいた野口正章と結婚、翌7年、娘・郁(号・小蕙)が生まれる。明治15年、第1回内国絵画共進会へ《山水》《桂花》を出品、褒状を受賞。明治19年には東洋絵画共進会へ《二喬読兵書図》《花卉》を出品、前者が銅賞となり、宮内省御用品に選ばれる。また同会へ皇太后と皇后が行啓した際には、他の女性画家たちとともに御前揮毫を務めた。以後小蘋は国内外の各種展覧会へ出品し、受賞すること多数、御用品や御前揮毫の栄にもしばしば浴した。明治22年、華族女学校画学課授業囑託となる。明治27年には明治天皇・皇后の大婚25年に際し、枢密院官吏、内務省、会計検査院より依頼の献納画を揮毫。明治32年には東伏見宮妃と小松宮妃の画学教導を拝命する。明治35年、奏任待遇にて常宮内親王の御用掛となり、さらに周宮内親王と北白川宮満子女王の画学教導を拝命。明治37年には女性初の帝室技芸員に任命され、翌38年正八位に、41年従七位に叙せられる。大正4年(1915)には大正天皇の御大典で用いられる《悠紀地方風俗歌屏風》を揮毫した。(T)

#### 【主要参考文献】

『没後100年 野口小蘋』展図録(山梨県立美術館、2017年)

仲町啓子監修・中村玲編『野口小蘋—女性南画家の近代—』(実践女子大学香雪記念資料館、2019年)

### No.14 2022年度新収蔵品

#### せいろくちくりんさんすいず 青緑竹林山水図

大正5年(1916)

絹本着色・軸

126.1×41.9cm

賛「密竹滴残雨高峯留夕陽」

款記「大正星次丙辰首秋寫於間雲

野鶴草堂小蘋」

印章「野親之印」白文方印、

「野氏清婉」朱文方印



### ありもとようこ 有元容子 (1949-)

1949年愛媛県に生まれる。1971年に東京藝術大学美術学部絵画科日本画を卒業。1977～80年に創画会展に出品、1978～79年には春季創画展にて春季展賞を受賞した。1994年以降、両洋の眼・現代の絵画展に毎年出品している。そのほかにも多くの展覧会に出品し、個展を多数開催している。

故郷である瀬戸内海の島々や全国の山岳風景を多く描いており、子供時代を自然に囲まれて過ごした影響が表れている。また、山に実際に登り、山岳風景をスケッチし、それらを作品として描きおこしている。1988～89年には唐津の隆太窯に内弟子として入り、陶芸を学ぶ。翌年には東京に戻り、岡本工房にて作陶を始め、その後、個展やグループ展において、絵画、陶芸作品を発表する。また、陶芸用の土や山の土を用いた絵画作品も発表している。

2006～12年まで、実践女子大学文学部美学美術史学科の教授として、絵画及び陶芸の分野で学生を指導し、美術科教員の育成に尽力した。共著に『花降る日』、『有元利夫 絵を描く楽しさ』があり、2021～22年には『愛媛新聞』のコラム「四季録」にエッセイを寄せた。(Y)

#### 【主要参考文献】

『有元容子作品集』(平野古陶軒、2009年)

『有元容子日本絵画展 2014—山の風・海の風—』(三越伊勢丹、2014年)

有元容子「四季録」エッセイ(『愛媛新聞』、2021年4月～2022年3月)

### No.15 2022年度新収蔵品

#### しま 島

2014年

紙本着色・額

89.8×115.6cm

右下に署名「容」

### No.16 2022年度新収蔵品

#### くらせ かしら 鞍瀬の頭

2016年

紙本着色・額

64.2×89.9cm

右下に署名「容」

### No.17 2022年度新収蔵品

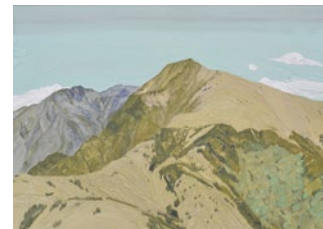
#### かいこまがたけ 甲斐駒ヶ岳

2019年

紙本着色・額

115.7×79.6cm

右下に署名「容」



《鞍瀬の頭》

[解説リーフレット]

## 第6回新収蔵品展

発行日：2023年5月20日

編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

HP：https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/

凡例

・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した「第6回新収蔵品展」(2023年5月20日～6月11日)に際し、発行したものです。

・記載は作家名、作家解説に続いて、展示番号、新収蔵年度、作品名、制作年代、材質・技法、形状、寸法、賛、款記、印章、寄贈者情報等を記し、一部の作品については図版を掲載しました。

・掲載の作品はすべて、実践女子大学香雪記念資料館蔵です。

・本パンフレットの編集は児島 薫(実践女子大学香雪記念資料館 館長)、田所 泰(同学芸員)が担当し、鈴木 美有(同事務職員 [学芸事務])、矢野 綾香(同臨時職員 [学芸補助])、赤地 理子(同臨時職員 [学芸補助])が補助しました。

・作家解説は、田所 (T)、鈴木 (S)、矢野 (Y) が執筆しました。